

「幼児教育の源流」(Ⅷ)

ロバート・オウエンの幼児教育思想〈その二〉

山 根 祥 雄

はじめに

前回、オウエンの幼年時代から青年時代の経歴、ニュー・ラナークでの実践、さらに実践を総括し、「新性格形成学院」を構想している、かれの主著『新社会観』の内容などについて、いわばかれの生活史を繰るといふ方法でのべてきた。今回は、『新社会観』以後のオウエンの幼児教育思想についてのべてみたい。オウエンは、産業革命の子であったとよくいわれる。つまり、かれは産業革命の進捗とともに、産業資本主義の正・負両極の特徴をおびながら生きたということである。一方に、開明的な工場主の立場、他方に労働者の地平に立つて資本主義体制というものの克服をめざす社会改革家の立場、この両方の立場を、オウエンは体験してきた。オウエンを歴史のなかで顕著なものにさせているのは、前者から後者への変容によってであり、産業革命の進行に対する危機意識にはかならない。

『新社会観』から『ラナーク州への報告』にかけては前者から後者への思想的変容の時期であった。かれの思想は、ニュー・ラナーク統治以降の貧困労働者や村人の改善から、かれらの合理的な教育と訓練による村・村人の改善、ひいては社会改革の思想へと深められ、広げられていった。こうしてオウエンはニュー・ラナークの実践の高まりと、成果の上に立つて、諸改革の立法化へむけての建議を主軸とする行政闘争、ならびにその上からの改革へとつきあがるものとしての諸集会・文筆活動を展開していくのである。

工場法

産業革命段階の労働問題、これこそオウエンが終生かけてとりくんだ課題であった。労働条件、雇用の問題、労働価値の問題など、多岐にわたる問題であるが、いずれも、オウエンにとってぬきざしならない問題であった。そうした一環として、あ

まりにも有名で悲惨な児童労働を中枢とする工場立法の問題に對するとりくみもまた必然であつた。

一八一五年グラスゴウで、スコットランドの製造業者の集會が催された。そこでオウエンは、綿花輸入関税低減の申請ならびに幼年工労働条件統制立法の決議案を提議している。前者には満場一致拍手の賛成を得るのだが、後者には業者の賛意を得ることはできなかった。オウエンは自己の個人的な働きかけによつて、議會に訴える運動をはじめた。かれはロンドンへ出かけて指導的な議員に会い、議案提出をうながすが、商工業者たちの強硬な妨害等に会う。後に首相となるピール卿を通じて提出したオウエンの原案は、十歳未満の労働、十二歳未満六時間以上の労働の禁止、初等教育（男児女児ともに、読み、書き、かつ女児は裁縫、料理、家事一般）終了まで就業を禁止するといふものであつた。審議は遲滞し、原形をとどめぬ法案にオウエンは意欲を失つてしまつた。これが教育その他の重要条項が削除された骨抜きの一八一九年工場法である。

同年「工場制度の影響にかんする考察」において、オウエンは機械の導入によつてひきおこされた次のような弊害を指摘した。つまり、労働の強度と時間の激増、教育、娯楽時間の減少、そして家庭生活での習慣の破壊など、産業革命進行による奴隸的使用への変化に伴う悲惨さに対して、国家の指導と費用負担

のもとに教育を行なうことを提唱している。

幼児学校

ニュー・ラナークの統治は着実に進行した。そして一八一六年「新性格形成学院」の開設にあたり、「ニュー・ラナーク住民への講話」を行なつた。この中で協同村建設のための村での施策の説明と、学院設置の目的を訴えて、村民の協力を要請している。この学院の目的は、単に外面的な習慣を直すことではなく、全住民の内面的性格を徹底的に改良することであり、個人の自主的な判断を尊重し、節度、慈愛をもつて近隣の福祉に貢献することであつた。そしてこの原理にもとづいて、単に教育施設だけでなく、共同体の組織を提案し、犯罪と貧困のない知性と幸福をもつた社会の形成を訴えたのである。すでに一八〇九年ごろ着手され、一六年にいよいよ実施され、オウエンの渡米（二四年）まで継続された「新性格形成学院」とくにその幼児学校の評判は内外に聞こえ、「ニュー・ラナークの奇蹟」をみるために、多数の訪問者があとをたなかつたのである。

新学院の原理・組織・内容については、『新社会観』のなかで理論化されている。学院はむろんオウエンの構想する共同村建設の重要なモメントであり、国民教育制度の一環である。学院は村における家庭的、社会的習慣の欠如をカバーするための、

幼児、青少年、成人の利用できる、新性格形成のための環境設定である。村民にとっては、規律のとれた、ごらく、気晴し、休息の場所なのである。幼児にとっては両親がいつでもみることのできる遊び場が設けられる。五〜十歳のクラスには読み、書き、算、軍事訓練、とくに女兒には裁断、仕立て、料理なども教育される。実物教授が適用され、親しみのあるものから、有用・必要事項へと進む。説明は子ども達の発達に応じてなされるが、子どもとの対話が重んじられる。ともかく授業はわかりやすく、おもしろいものとするのが肝要である。

教育の根本原理は、「仲間をそこなうようなことをしてはならない。仲間の幸福のために全力をあげる」ことである。あらゆる機会をとらえて、各人の利益、幸福、他人の利益、幸福の関係を強調することが教育の要点である。学院には学校のほかに、村人たちからの害悪の除去と矯正のために、講堂、教会なども設置される。青年や成人には夜間講義がなされる。

このような学院のなかにあって、幼児学校は、教育力からいっても、もつとも重要な施設であった。外来者の関心の的はここにあった。

歩行できるようになるか、一歳になると収容され、一〜三歳の幼児は、昼食と夜間は住宅に帰される。幼児学校の第二の組の三〜六歳の子どもたちは、寄宿舎に収容され、十歳以下の昼

間小学校へ接続されており、幼児学校は子どもの基本的な習慣づけの学校でもあれば、小学校への準備学校でもあったのである。この幼児学校の二組は、年少組よりも年長組のほうに散歩が多いことが、相違点である。この二組からなる幼児学校では、子どもが生き生きと楽しく仲よく遊ぶことがまず第一とされる。

校舎では二時間半、残りの時間は戸外の遊びに費やされる。集団保育の強調である。むろん罰などは廃止され、個人的な不正は排除される。子どもは施設の中央に設けられた運動場で楽しく遊ぶのであり、雨天の場合、あるいは遊び疲れると、一六フィート、二〇フィート、高さ一六フィートの遊戯室が利用され、仲間と楽しく遊んだり、学習したり、午睡したりするのである。幼児の教室は階下の三室であった。この幼児教室には、動物の絵や地図それに自然の事物などが備え付けてあって、子どもは、好奇心に訴えられながら、刺激的に実物教授を与えられる。そのさい、生き生きとした、しかもうちとけた対話（お話し）が忘れられてはならない。性格形成のための合理的教育制度として、二歳以上の子どもにはダンス、四歳以上の子どもには音楽、集団的生活鍛練として軍事訓練、地図による地理が教育される。十歳以下の子弟には原則として書物の教育はしない。子どもはできるだけ戸外に出させて遊ばせる。親の幼児学校の参観もすすめられる。また、小学校は無料であるが、幼児

学校では月謝が徴収され、教材費にあてられる。徴収の理由はオウエンの言によれば、貧民学校と区別するために、とある。これは、オウエンの貧困労働者子弟の教育に対する慈善的立場を示す発言とみなすことができる。

幼児学校の教師には、最初、読み書きは苦手ではあるが、生来子ども好きで従順なブキャナンが担当された。保母にはヤングという十七歳の女性が任せられた。オウエンがかれらに与えた忠告は、「決して打つな、おどすな、ば言を使うな、いつも愉快な顔で、親切に言葉も優しく小児に話せ、えこひいきをするな、そして遊び仲間を幸福にするように行動することを子どもにたえず教えること」などであった。そしてかれらは、オウエンの忠告どおりに教育する。しかし、あとで述べるように、ロンドンに新しい幼児学校設置のころみがあって、ブキャナンがまねかれた。そして学院の後任教師は、学院の三つの学校出身の十六歳の青年であった。オウエンにいわせれば、かれはブキャナンよりも効果を上げたといわれる。

幼児学校を中枢とする「新学院」は、オウエンの渡米まで九年間続けられるのであるが、相当な教育実績をあげたことは、オウエンや長男デールの言をまたずとも事実であったろう。ただし実際には、幼児学校で二歳未満の乳幼児が保育されたという確たる記録はない。三歳以上の子どもについては、一八一六

年オウエンの工場委員会や教育委員会への報告にみられるが、三歳未満の乳幼児の記録はない。二歳以上の子どもに触れているのは、一八一九年リーズの視察代表団の報告書である。しかし三歳十歳の幼児学校、小学校についての教育実践については、同じリーズの報告書でも子どもの間にけんかもないことを伝えているし、また子弟の教育に対する外来者の感嘆は『オウエン自叙伝』にもべられている。また幼児学校が他所で設置される気運からも察せられるように、「新性格形成学院」は、幼児学校、小学校を中核として、大きな成果を積んでいったように思われる。しかしながら、オウエンの幼児学校の実際のカリキュラム、教育方法、具体的実践、さらに収容人員、財政など具体的実践についてはいまのところ不明である。

さてオウエンにならった幼児学校設置のころみがなされる。まずランズダウン侯、ブルウム卿などが中心になって、ロンドンに貧民の幼児学校が設立される運びとなった。オウエンの学院のブキャナンが校長に選任され、学校の全権をまかされた。

しかしこの幼児学校は、ニュー・ラナークとよく似ていたが、子どもを打ったり、罰したりして古い不合理な精神とやり方で支配されてしまつて、失敗に帰している、とオウエンはいう。

第二のころみは、クエーカー教徒が中心となつて、ウィルダースピンを校長に迎えて設置されたスパイタルフィールドの幼

児学校である。オウエンはかれを熱心に指導し、やがてかれはオウエンの門弟に数えられる。オウエンにいわせれば、ウィルダースピンは、幼児教育を合理的社会制度のために合理的性格を形成せんとする第一歩として理解する精神をもちあわず、ただ外的な形態の模倣だけである、と。

以上の二校をその手はじめとして、やがて幼児学校は、イギリスに定着していくことになるのである。

宗教否定と労働者救済

ところでニュー・ラナークの実践によってとみに高まったオウエンに対する一般の関心、とくに上層階級の人びとのオウエンに対する少なからざる賛意も、かれの宗教否定の表明によって変容する。

一八一七年、シテイ・オブ・ロンドン・ターヴァン公開集會が催された。この大集會の目的は、人類のあらゆる本質的・永続的な進歩や改良に対する障害となっている宗教を克服し、さることであった。オウエンが長い間自分のなかであったためてきた宗教否定は、ここに一つの結実をみるのである。オウエン自身、第二集會を生涯中最大の日であったと語っているように、かれはこの集會に相当な決意と覚悟をもってのぞんだ。そしてこの集會は社会に大きな問題を提起することになった。当時、宗教

を否定するということは、オウエンにとっては必然的な結論であったが、人びとには少なからぬ衝撃を与えたことであろう。とはいえ、オウエンは宗教を全面的に否定したわけではないのであるが、この集會でかれは個人主義的自由競争と共同の原理とを対置させて、利潤追求の個人主義的な社会を変革すべきであるとした。

同年、オウエンは恐慌の原因と救済等について、下院救貧法委員会に報告した（「工場労働貧民救済委員会への報告」）。謀議をこらされて審問もなされなかったが、そこでは、貧窮の原因を機械の導入による労働力の価値低下とし、失業労働者に職を与え、機械を労働者追放のためにではなく、労働者に奉仕する手段とすることを訴え、そのために理想的な協同村の計画を示した。

大陸旅行

一八一八年、ジュネーブのピクテール教授の招きによって、オウエンは大陸に出かける。オルレアン公、フンボルトなど、当時パリ、フランクフルト、ジュネーブ内外の錚々たるエリートたちと会見している。オウエンはちよつとした「パリの流行児」であった、と述懐している。注目すべきことには、オウエンは名高い三つの貧民学校を訪れている。

まずオベルリン神父。これはオウエンの記憶ちがいで、ピエール・ジラードではないかといわれている。オウエンは自分の実践の工夫を、とくに幼少期の教育の重大さをジラードに語っている。ジラードも熱心に耳を傾けたようである。第二にペスタロッチの貧民学校である。ペスタロッチに対して、オウエンは、かれを旧式の教育原理を一步進めているだけであるとし、純朴で実直な教育実践家と評価したにすぎない。ただし以後新学院ではペスタロッチの算数教科書が使用されている。さらに、後にのべるようにアメリカのニュー・ハーモニーでもペスタロッチの影響がみられる。第三に視察した学校はドゥ・フェレンベルクの貧民学校である。オウエンはここに数日滞在している。フェレンベルクはオウエンの考えに傾倒し、オウエンもかれに幼児学校の開設をすすめている。折からフランクフルトで皇帝会議が開かれ、かれは、社会の現状と将来の見通しに關する建白書を提出した。

オウエンに対する反論

大陸がえりのオウエンをまっていたのは、かれの宗教批判に對する世間の反論であった。新聞などにおいても批判されたりしたが、かれの信念はゆるがない。当時、かれに反論した人びとのなかには、バーデッド、コベット、オコナー、ジョーンズ

などがいた。近代經濟学者ならびに教会關係者が多く反論をとなえた。オウエンの理解者、支持者も少なくなかった。ゴドウィン、ケント公あるいはリーズの公開集会でニュー・ラナークの実態を報告した人びとも含まれる。さらに、好意はもちながら、二、三の点で反論した人びととしては、マルサス、ミル、リカード、ヒューム、プレイス、アトウッドなどの面々があげられる。意見の相異は、オウエンにいわせると次のようである。オウエンの主張が、國民教育ならびに國家的な雇用のみが合理的でそうめいなる富める優れた人びとを創造しうる、というものである。これに対して反論の人びとの見解は個人主義的原理に立って大衆の國民教育はする、國家的な雇用はしない、というものであった。

以上のようにして、引続き工場の監督、性格形成原理の普及、工場見学者の接待、公開集會出席などに多忙であったオウエンは、ラナークを中心として下院議員候補者となった。しかし、運動不足と反対派の買収によって落選という結果に終わる。

『ラナーク州への報告』

一八二〇年ラナーク州の總會にあてて、ジェントルマン委員會のもとに應じてなされた報告書が、『ラナーク州への報告』である。かれの『新社会觀』とともに、とくに合衆國の注目を

あびた。この著作の中で展開されたのは、主要には合理的に計画化された共同体の社会組織の提示、貧困労働者の根本的な性格改善と恒久的生産的雇用を与えることによる貧困労働者の救済であつた。

かれはまず経済機構について、消費と生産の歩調を重視した。犁から鋤耕作に変え、恒久的・有益な雇用手段を提供すること。さらに鋤農制度への改革、第三に労働生産物の交換のための価値標準を自然的な人間の労働とすることなどの改革であつた。

この計画の細部は本著の第三部で扱われる。まず規模は三〇〇〜二〇〇〇人、耕作面積八〇〇〜一五〇〇エーカー、最小の労働費用で最大の生産物をあげる。さらに、「新性格形成学院」のような住民のための衣食住および子弟の育成と教育のための施設についてのべられている。それは『新社会観』よりも、環境性格形成理論は体系化され、一層のみがきがかけられた。また「学院」開始以後の実践をふまえて、一方でこの種の施設の大切さを強調しながらも、自分の実践に過渡的生活段落のための制度というふうな限定をつけている。

そして精神労働と肉体労働の分離に注意を払いながら、労働諸階級の個人における広範な精神的・肉体的諸力の結合、私的利益と公共の利益との完全な一致などがうたわれる。さらにイングランドの労働階級の力と幸福とが、その完全でしかも自

然な発展を、すべての他の国の力と幸福との同等な増大を通じてしか達成されないということを理解させる国民教育の強調がある。

子弟の、正しい育成と教育のために、合理的計画が必要である。まず、幼児や子どもの能力や素質の解明が課題であるが、この生来の素質に加えて、環境による諸印象が生涯の全時期を通じて個々人の性格を決定するのである。人間はまさに環境の動物なのである。したがって人間素質の改良のためには、生後の幼児に影響力をもつ環境改善が必要である。したがって諸施設の建設は、あたらしい世代の幼児や子どもにも悪影響を与えるすべての環境排除の意味があるのである。幼児や子どもたちの育成・教育方法が施設の成否を決定する。むしろこの環境では非合理的な個人的なほう賞、刑罰、競争の制度はすべて排除される。

さらに貧民に対する恒久的な有益な仕事の保障を国家政府に訴えるのである。なげかわしい圧縮は現在の分業と現存の一般的な社会的諸制度の確実にして必然的な結果なのであるからである。

『ラナーク州への報告』は、オウエンの経済上の見解、ならびに提案された村の産業組織についての明確な、総合的な表明であつた。

一八一六年「ニュー・ラナーク住民への講演より」も共同社会主義へ向かつての一步前進をものがたっている。そしてサン・シモン、フーリエなどに影響したといわれている。

一八二一年の三部作、『ラナーク州への報告』、『社会制度』、『窮乏原因の一解明』は、共同社会主義の核心を示す展開図であり、その後の社会主義実践の具体的な青写真をなしている。

同年、最初のオウエン主義のロンドン協同経済協会ができた。

一八二四年リカードウ派社会主義者ウイリアム・トムソンは

『富の分配原理研究』において、オウエン的な協同組合の構想を提示した。二七年にはプライトン協同組合が設立され、翌年「コーポレーター」が発行された。

ニュー・ハームニー

そうこうするうち、ニュー・ラナークの工場は、オウエンの宗教批判表明以降、合資者アレンとの間で競争、不和が激しくなり、学院での教育の方法は後退し、宗教が強制され、ダンス教師が追放などされる。そこでオウエンは、学院を長男のデーブルにまかせ、次男のウイリアムをつれてアメリカに渡る。アメリカはかれにとって、従前からの綿花の買い入れ先であり、『新社会観』も普及し、また新開地として自由の空気に満ち、すでに理想の村建設の実験も、いくつかこころみられていた。オウ

エンは自分の理想を実現するために新天地をもとめ、インディアナ州のジョージ・ラップの宗教的協同村ハームニー村を買いつつて、一八二五年、二万エーカーの広さ、九〇〇名ばかりで、ニュー・ハームニー平等村の建設に着手する。六月には一三〇名が在学し、かれらに村費で食事、衣服を支給し、無償教育を保障した。

翌年制定されたこの村の憲法には、権利・義務の平等、生活の実務と慰安における協同的結合、財産の共有、言語活動の自由、行為における誠実、親切、交際における礼儀、秩序、健康の保持、知識の獲得、最良のものを最も有利に生産し、使用する実施、法律の遵守などという原理がうたわれ、全村一家族の共産主義、教育の重視、二十一歳以上の成員の集会による立法、議会による行政などが規定されている。

ニュー・ハームニーの教育に当たることを同意し、オウエンが村の教育を一任したのは、ペスタロッチの影響を受けたウイリアム・マクリュアであった。教育協会ソサエティの学校は、三教育階梯四〇〇名近く在学者がおり、そのうち、二―五歳の幼児が約一〇〇名いた。やがてかれは、オウエンと衝突し、村の崩壊を早めたのである。しかし、オウエンは、ペスタロッチの教育理念をとり入れた。またスイスのペスタロッチ学校で、教育実践していたジョセフ・ニーフ夫妻を招いたりした。こうしてペスタ

ロッチの教育の理念はアメリカに大きな影響を残すのである。しかしながらこの勇敢な共産主義の実践も、村民の質がまちであり、消費の平等であつて計画的な生産の協同ではなく、ダンスや集会や対論はなるほどうまくいったにしても、生産の面からは混乱し、また意見の対立によつて村を去るものもあり、しだいに無秩序が村をおおふ。こういう状態になつて、オウエンは一時独裁制を試みるけれども、財政難、不和、労働意欲減退などのために村の経営は失敗に歸した。オウエンは村を放棄し（二八年）、帰国の途につく。

協同組合運動

アメリカでの実践の失敗にもかかわらず、『ラナーク州への報告』に描かれた協同社会の福音は、イギリス国内に徐々に労働者の中に広がつていった。オウエンを迎えたのは、すでに記したように、ブライトン協同組合（二七年）、「コーポレーター」の発行（二八年）、などの協同組合運動の発展であつた。一八三一年最初の全国的な協同組合大会が開催された。五〇〇を数える組合の多くは、労働組合活動に基礎をおいているため、オウエンは労働組合を自分の理想実現のために適当な手段であると考えようになり、労働者あるいは生産者の協同組合が生産物を交換するための労働交換所を奨励するようになった。オウエン

の考えでは、貨幣の存在こそが人びとの困窮と市場不足を生み出すのである。そこで、一八三二年ロンドンに「国民公平労働交換所」レイバー・インクスチェンジを設立した。そこでは交換のために貨幣ではなく、直接商品の生産に投ぜられた労働時間を示す労働券を発行した。この券によつて、生産者組合や労働者個人は他の生産物と交換するものであつた。この制度を用いることによつて、中間商人は排除され、労働者は正当な報酬をえ、失業者も生産物を交換し、生産と消費の不均衡は解消するとオウエンは考えたのである。しかし実際問題として、一般の市場価値と労働価値とが併存するはずもなく、一時はかなりの盛り上がりを見せるがすぐに倒産する。オウエンはこうして、資金を失いはしたが、かれの熱意は弱まらない。かれは集会での演説、雑誌で、あくことなく自分の理念を訴えてやまなかつた。オウエンは理想実現のために当初資金調達を金持ちの慈善に期待したが、やがて労働者に訴え、労働者の中に支持者を求めようになる。

労働組合運動との提携

一八三二年の選挙法改正のさいにも、オウエンは協同組合、労働組合、労働交換所の指導的立場にあつた。この選挙法に反対する労働者は経済闘争を展開し、オウエンも今や労働運動に期待をかけたのであつた。三四年には一〇〇万組合員の全国労働

組合大連合も生まれ、かれは議長となった。この組織は単に労働条件を改善することを目的とするだけでなく、労働者の統制による協同組合組織によって、資本主義を抑圧することをもねらっていたのである。

この大連合は、組織確立後まもなく、資本家の反撃と政府の大弾圧によって一年もたないうちに、瓦解してしまった。オウエンはその後の狭隘なストライキや階級闘争にあきたらず、また組合幹部ともそりがあわず、しだいに現実から遊離して、ストライキではなく、説得・教育・宣伝をめざす内外合同産業人知識協会を設立する。このようにしてオウエンと労働階級との提携は、一八三四年までであつたといえる。以後労働階級はチャーチズムへと歩を進め、オウエンは再び超階級的な説教家となり、五三年、八十二歳のときには心靈論に改宗して、伝導者となつてしまった。五八年、社会科学協会の演壇上に倒れ、まもなく郷里で八十七年にわたる波乱に富んだ生涯を閉じた。

おわりに

オウエンの生涯と思想は、以上のべてきたように、かれの諸実践と切り離して考えることはできない。かれは自己の生活体験を学説へと積み上げ、さらに自己の学説を実践のなかで血肉化させていったのである。一生を通じての著作、集会、パンフ

レット、機関誌、定期刊行物などの多方面な活動の豊富さが、その証左である。

さて、かれの教育思想がまったくオリジナルなものでないことはいうまでもない。しかしかれの教育思想は、性格形成論として特徴づけられる。

性格形成論は、環境教育論であつて、二つの方向を導く。一つは、白紙説タブラを思わせるような、人間にとつての無限な教育可能性であり、環境性格決定論からする人間性格に対する寛容である。二つは、積極的に人間教育による社会改革である。その社会は競争や不和のない万人の幸福と福利をもたらす社会である。この社会改革論は、やがてオウエンのなかで共同社会主義へと醸成されていくのである。二つの立場からすれば、現在つくられている人間性格は、個人的な責任のものでないこと、さらに悪環境の設定が導かれる。悪環境の排除という側面から労働者に対する訓練と雇用の保障が、新環境の設定からいえば、国民教育制度の整備がうたわれる。

この性格形成論の二つの立場は、ともにあいまって、幼児の柔軟な可塑性への着目によって、幼少期からの質的・量的教育の保障を必然的に要請する。このいみで性格形成論は、かれの終生の課題であつたのであり、安易な性善説の設定ではなく、人間形成と社会との不可分なダイナミックな把握であつたので

ある。

産業革命の進行に伴なう人間疎外と貧困を前にして、「新性格形成学院」は、オウエンの性格形成論の実践であった。ここで実践の成果がオウエンの性格形成論を迫力あるものにしていくのであって、とくに一―六歳の幼児学校は注目すべきである。幼児学校はオウエンの性格形成論から必然的直接的に生みだされたものであると同時に、産業革命による家庭破壊に対する保育施設の普及という時代的な急務でもあったのである。

イギリスの幼児学校は、フレーベルの幼児園設置に先立つてと四半世紀、オウエンによって着手された。オウエンの後、先に紹介したように、ロンドンとスパイタルフィールドに幼児学校が設置される。以後慈善事業の色が濃く、「幼児学校運動」が展開され、次第に普及拡大された。三三年からは幼児学校へも補助金が支出されるようになり、幼児学校数はそんなに多くはなかったが、かなりな成果をあげたことであろう。しかし、幼児学校では当初のオウエンの理想な教育方法が見失われ、よくない意味での「学校化」に拍車をかけることとなった。それにもかかわらず、オウエンに先鞭をつけられたイギリスの幼児教育は、ウィルダースピン、ストウ、メーヨー兄妹などの尽力によって次第にイギリスに定着していく。

最後に本稿のまとめとして、オウエンの性格づけをはかりた

いと思う。

オウエンの思想の深まりなり、発展、なかんずく、かれの社会改革への前進は、『新社会観』から『ラナーク州への報告』にかけての数年間の諸活動に集約されているように思われる。むしろこの期間の活動のなかに、かれの社会改革のエネルギーの燃焼と、ダイナミックな変化があったことは否めないように思う。

にもかかわらず、オウエンの一生が、開明工場主から社会改革家への発展として特徴づけられるにもせよ、オウエンにとつてむしろ問題は根本的に、客観的条件として労働運動の未成熟という歴史的規定もあって、労働者の、あるいは労働のもつ人間自己形成力というものを見失っているということである。つまり、あくまでも労働者へ向かう真摯な態度なり、実践なりは、同時代の「最大多数の最大幸福」原理の功利主義的思想家たちとは一線を画するものであった。

しかし、かれの営みは組織によらない個人的営為であり、それゆえにするどくもあったが、社会改革への広がりとは十分実現されなかった。事実かれの漸次的社会改革という立場は一生貫かれていた。またオウエンの訴えた相手は、決して労働者自身ではなく、おおむね社会の指導者であり、議会であり、知識人であった。しかも、人間性に関する知識ないし、性格形

成論の普及が直線的に社会改革と結びつけられたのである。さらに個人主義の利潤追求の自由競争と私有財産制との否定にまではのぼりつめるが、貧富共存の思想にとどまっている。こうしてオウエンの社会改革論は資本主義社会批判までは到達しているけれども、その後の社会改革の実現有効な展開と展望をわれわれに教えてはくれていない。

(広島大学)

主要参考文献

原著書 (オウエンの原著は以下の二点に収録されている)

- (1) R. Owen, *The Life of Robert Owen*.
- (2) R. Owen, *A New View of Society and other writings*, intro. by G. D. H. Cole, *Everman's Library*.

邦訳書

- (3) 五島茂訳『オウエン自叙伝』 岩波文庫
- (4) 楊井克巳訳『新社会観』 岩波文庫
- (5) 永井義雄・鈴木幹久訳『ラナーク州への報告』社会科学ゼミナル48) 未来社
- (6) 渡辺義晴訳『社会変革と教育』(世界教育学選集) 明治図書

単行本

- (7) 五島茂『ロバート・オウエン著作史』(大阪商科大学研究叢書) 一九三二年
- (8) 五島茂『ロバート・オウエン』三省堂 一九三四年
- (9) 森戸辰男『オウエン・モリス』(大教育家文庫21) 一九三八年
- (10) 芝野庄太郎『ロバート・オウエンの教育思想』御茶の水書房 一九六一年
- (11) 白井厚『オウエン』(世界思想全書11) 牧書店 一九六五年

研究書

- (12) 柳久雄『生活と労働の教育思想史』御茶の水書房 一九六二年
 - (13) エンゲルス著 大内兵衛訳『空想より科学へ』岩波文庫
 - (14) クループスカヤ著 勝田昌二訳『国民教育と民主主義』岩波文庫
 - (15) ラスク著 田口仁久訳『幼児教育史』学芸図書 一九七一年
- その他イギリス教育史研究書、オウエン研究論文参照。